

■第7回日本放射光学会功労報賞報告

堀米利夫氏（分子科学研究所）

解良 聡（UVSOR 施設）

2020年1月10日の日本放射光学会第33回総会にて、堀米利夫氏が第7回功労報賞を授与されました。推薦者を代表して、堀米さんのこれまでのご経歴と業績を簡単に紹介させていただきます。堀米さんは1973年、高エネルギー物理学研究所の共通研究系・工作室（現機械工学センター）に勤務され、機械工作を中心に物理実験機器の設計・製作を開始されました。その後、1980年、岡崎国立研究機構分子科学研究所へ異動となり、同研究所の装置開発室の一員として機械工作を中心に各種実験機器の開発・設計・製作などの技術支援に携われました。特に、同研究所の極端紫外光研究施設（UVSOR）に関する実験機器の開発における貢献は、独創的なビームライン分光器や各種実験装置の設計・製作例など、顕著なものが多数あります。一方で、製作品として明確な形に現れない、種々の実験装置に対する改良や創意工夫による研究者支援は、日常の技術業務の一環として枚挙にいとまが無く、その高い技術力や技術的発想力は、多くの研究者から抜群の信頼が寄せられています。2002年、UVSOR 施設の技術職員に配置転換され、ビームライン分光器や超高真空マニピュレータの極低温機構の開発に代表される各種設備の設計・製作をより精力的に押し進められました。その間、同氏の開発した設備等の一部は、国内他施設のビームラインのデザインとして転用されており、特に、超高真空用試料輸送機構の治具は、UVSOR 以外の放射光施設のみならず、様々な実験室においても、同一のメカニズムとして共通化されたことで、国内での機器の一般化に大きく貢献されています。時に堀米さんは、設計・製作への熱い思いから、ユーザーが持ち込んだ製作依頼図面に対して非常に厳しい添削指導を行われたようですが、当時大学院生や若手助手だった研究者が、堀米さんとの設計図面のやり取りを通じて、ご自身が実験研究者として自立する上で、絶大な教育



写真1 総会での授賞式の様子。堀米氏と朝倉会長（2020年1月10日、第33回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム、ウイングあいち大ホールにて）

効果が有ったという賞賛の声が数多く聞こえております。

このような堀米さんの豊富な経験と高い技術力は、代替し難いものであり、弊施設の研究レベルを維持する上で最重要であるとの判断から、2015年、定年を迎えた後も、引き続き特任専門員という身分の分子科学研究所の職員として雇用されています。従来からの活動レベルを維持していただきつつ、後継者の育成にもご尽力いただいています。同氏の貴重な技術を次世代へ継承させるべく、後輩技術職員との共生と熱心なご指導により、現在、その最終段階にきております。

以上のように、堀米さんの放射光科学における技術開発のご功績は、多くの実験研究者の要望・希望を具現化したことに尽きると言えます。その技術的貢献は、推し量ることのできないものです。まだまだ現役として可能な限りご活躍いただき、若手スタッフに温かいご指導をいただければと思います。この度は、誠におめでとうございました。